



館林城の
再建をめざす会

“よみがえる館林城下町”

次号予告

次号(6号)の特集

豎町(たつまち)・材木町(ざいもくちょう)

(2021年11月発行予定)

城下町を東西に走る主要道である豎町と材木町。賑わったいにしえの通りをご紹介。

前号(4号)の告知で特集エリアを豎町・紺屋町としましたが、豎町は次号(6号)に変更。
創刊2号の特集で谷越町をいちど紹介したのですが、それは往還沿いの商人町だけでした。
善導寺を中心とする寺町エリアを紹介できませんでした。(今号で詳しく解説しました。)
豎町(たつまち)は次号で特集します。乞うご期待!

令和2年5月吉日 館林城の再建をめざす会・会長 田中茂雄

※前回100円でお買い上げの皆さまへ感謝。寄附もいただきお礼申し上げます! 本誌印刷費に充当しました。今回もよろしくお願いします。
[お礼] 聞聲堂書店(3月で閉店)様、今までのご協力ありがとうございました。

「館林城下町だより」

～5号～

特集 紺屋町・谷越町

編集: 館林城の再建をめざす会

発行日: 2021年5月16日

発行者: 田中茂雄

発行: 昇文館

(昇文館:祖父が神田表狼楽町にて明治44年創業)
〒374-0037 館林市小桑原町855-1 優風館

[定価: 100円]



館林城下町だより

2021年5月5号

特集: 紺屋町・谷越町

広重筆
名所江戸百景より
『神田紺屋町』(部分)



紺屋町(新紺屋町)・谷越町

Konyachou

Yagoecho

職人町の紺屋町と名刹・善導寺を中心とした谷越町。
城下町の特色である町屋と寺町が調和していた魅力的なエリア。

館林は城下町だ！しかも関東を代表する城下町のひとつである。

あえて強調しないといけないのが実に哀しい。

幸い発展から遠のいたおかげで今でも江戸時代の街路がそのまま残る貴重な町でもある。

その良さを活かすべく町の再生に力を注ぐべきだ。

今号で紹介する紺屋町と谷越町は城下町の風情を色濃く残した町。

古びた道に江戸の空気が流れている。

【紺屋町とは】

紺屋とは染物屋(染色)のこと。

紺屋の居住地なので紺屋町となった。

全国の城下町によくある町名だ。

館林では染物屋の発展時期により

本紺屋町と新紺屋町のふたつの町名がある。

綱吉時代(延宝)の絵図に新紺屋町の名が記されていることから、新紺屋町の歴史もかなり古い。



【谷越町とは】

谷越とは谷地(鶴生田川両岸の低湿地)を越える

高台なので谷越となった。読んで字の如し。

谷越町はふたつの顔がある。

往還に面した商家が並ぶ(『城下町だより2号・日光脇往還特集』で紹介した商業エリアと

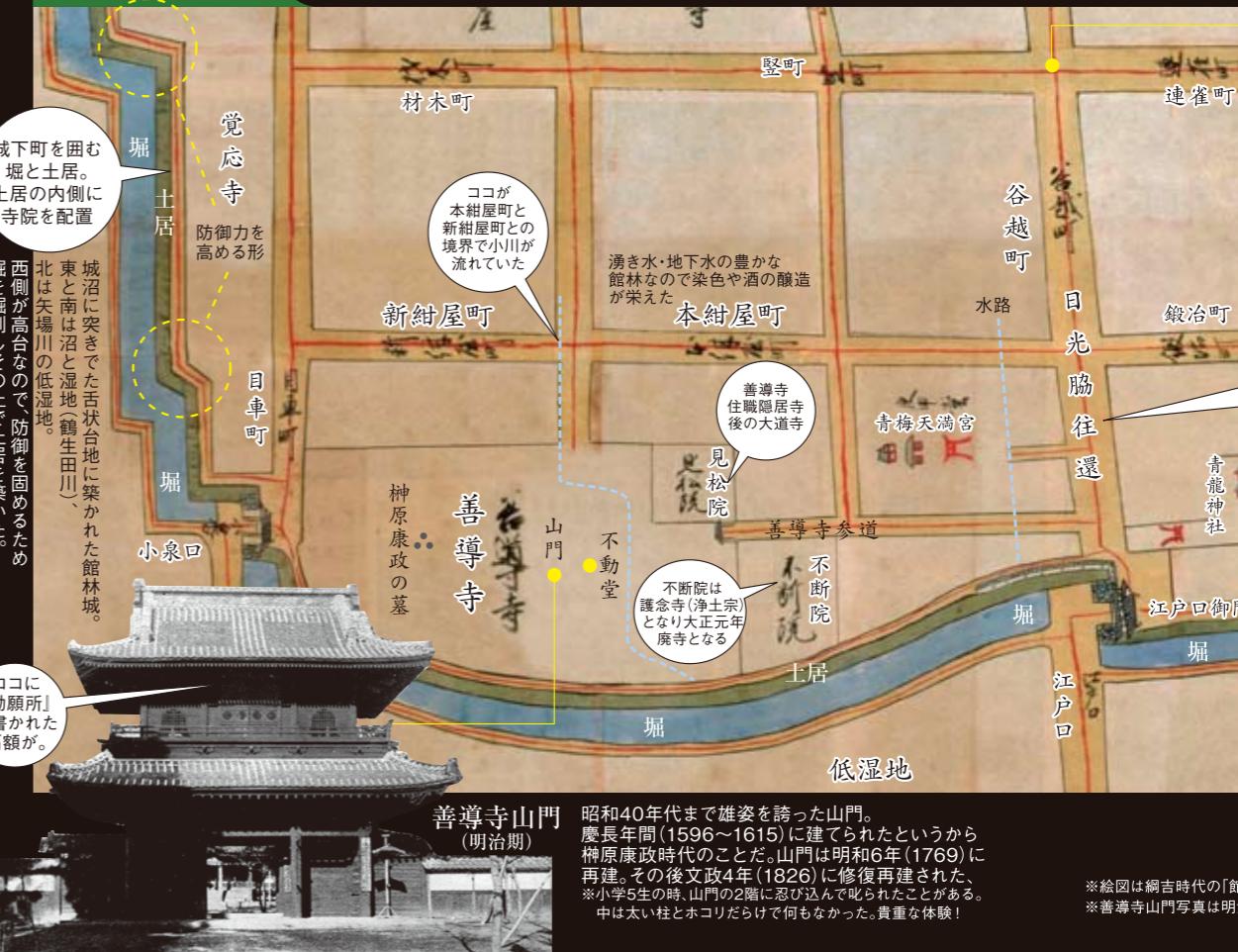
善導寺を中心とした寺町としての谷越町である。

今号では寺町の谷越町を紹介。



【綱吉時代の絵図を読み解く】

延宝6年(1678)



【大辻】

館林城下町の中心がココ。
高札が立っていた。(高札場)
両檢断家(青山・小寺)
が居を構えていた。
群馬銀行側に青山家
みずほ銀行側に小寺家だ。

日光脇往還
八王子～日光までの
街道。途中、中仙道を経由
佐野(天明宿)で例幣使街道
につながる。別名、「館林道」、
「千人同心街道」とも。
地元では「おうかん」とも
言っていた。

【江戸口御門】

城下町に入る正面玄関。
絵図をみれば、門の形状は
櫓門で2階から攻撃できる。
進入経路は坪形構造で
防御力を高めている。
武道館(東京)入口に建つ、
田安門を想像すればよい。

※小泉口門は門に屋根を
乗せた高麗門。

昭和40年代まで雄姿を誇った山門。
慶長年間(1596～1615)に建てられたというから
梅原康政時代のことだ。山門は明和6年(1769)に
再建。その後文政4年(1826)に修復再建された。
※小学5生の時、山門の2階に忍び込んで叱られたことがある。
中は太い柱とホコリだらけで何もなかった。貴重な体験！

*絵図は綱吉時代の「館林御城図」(国立国会図書館蔵)より
*善導寺山門写真は明治時代の観光絵はがきより

城下町の変遷。

経済発展が織りなす町の様相！

天正18年(1590)北条氏が滅び、榎原康政が館林へ。文禄4年(1595)周囲を堀と土塁で囲った惣構えの館林城(城内/城下)を完成！関東有数の城下町となる。武士の世が終わると、町の発展は経済が主役となった。江戸時代から明治末まで流通の基盤は水運。渡良瀬川と利根川に夾まれた館林は地の利を活かした商業(問屋)が栄えた。明治後期になると水運が衰退。時代に取り残されないため新時代の交通インフラ=鉄道の誘致が悲願となつた。

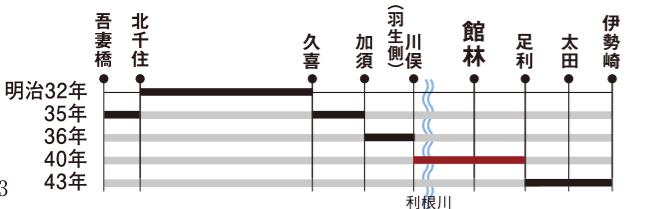
そうした状況下に立ち上がった人物に旧藩士・南條新六郎と熊谷直方(町長)等がいた。努力が実り明治40年、東武鉄道開通により経済発展のインフラが整つた。

城下町を変えた鉄道の開通！

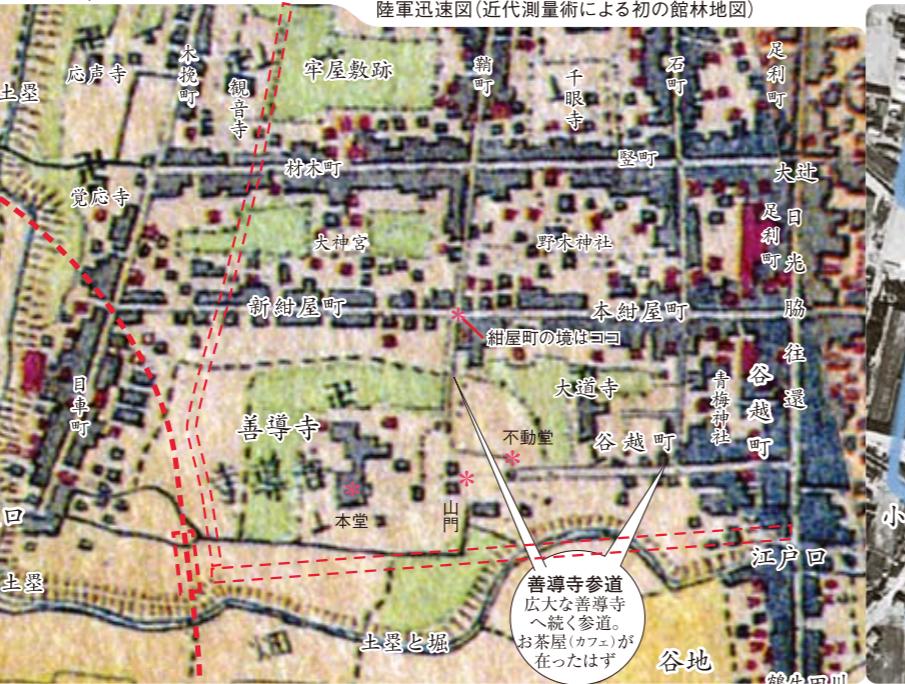
明治28年、鉄道開通を夢みた南條新六郎等発起人11名は東武鉄道を起業。(根津嘉一郎が創業したのではない)目的は東京と両毛(足利)を結ぶことだった。

明治40年、念願の館林駅開業！駅の誕生により人の動線が変わる。駅に通じる新道が作られ、新しい町が生まれた。城下町の様相が大きく変化することになった。

[東武伊勢崎線延伸チャート] (制作:田中茂雄 資料:東武鉄道社史より)



館林城下町(明治18年)



館林城下町(昭和22年)



谷越町を変えた善導寺の移転！

駅を降り、駅前通りの喧騒から一つ道を折れると、そこは善導寺の山門と境内の森が静謐な気を発散していた。写真を見て欲しい。

黒沢明監督作品のスチール写真のような情感を感じる映像だ。(駅隣接地にこれほどの静寂空間がひろがっていたとは…)

不動堂



↑昭和30年の善導寺広場(撮影者不明)

善導寺(ぜんどうじ)

[浄土宗] 谷越町 現在地:館林市楠町3692

天正18年(1590)榎原康政が館林に入封したころ、江戸で名高い豪隨意上人が行基開基という名刹の再興を志し善導寺の住職となる。榎原康政は上人に深く帰依し、寺を城下町に移転。立派な寺にした。浄土宗の学問所である檀林(関東18檀林)もある。善導寺で修行した僧のひとりに、渡辺華山の弟・定意がいる。弟は困窮のために善導寺へ預けられ成長した。袁い話だ。(出典:館林双書「館林の社寺」)境内には榎原康政、忠政、康勝等の墓がある。



善導寺広場(併設幼稚園の運動会 昭和38年)

昭和60年、都市計画(駅周囲の商業化整備)が実行され、善導寺の敷地が商業地となり、善導寺は城沼北東、郷谷の外れに移転した。商業施設待望の気持ちもよく理解できる(当時大学生の私は、昭和48年キンカ堂の開店で町の活気を感じた)が、今にして思えば、失敗だったといえる。しかし未来のことはだれにも判らない！今では無機質で澁いのない駐車場が広がるだけだ。(田中)

お散歩 マップ

紺屋町(新紺屋町)・谷越町

Konyacyo

Yagoecyo

江戸時代の紺屋町は染色の町だったはず。
だが、明治37年発行の「群馬県営業便覧」を
調べると、紺屋町に染物屋は一軒しかない。
当時の記録をみると食品や建設業の多い町だった。

明治40年(1907)、東武鉄道開通。
駅への新道が整備されると
人の動線が変化し、寺町(善導寺)
としての谷越町は一変!
新しい商店街が作られた。
かつての館林は織物の町でもあった。
商品の出荷を鉄道が担うことになり、
駅に近い紺屋町に織物同業組合や査定所が
建てられ賑わう町となった。

歴史ある館林駅(谷越町)も見どころが多い。
伊勢崎線、小泉線、佐野線が連結する館林駅は
鉄道ファンにとって魅力溢れた構内だ。
変電所(昭和2年竣工)は館林の産業遺産とも
いえる建築である。駅舎も美しい。
昭和30年代までは蒸気機関車が走っていて
その機関車の基地(機関庫)が駅構内にあった。
機関車を回転させる転車台もあり、少年の
興味を大いにそそる施設に満ちていた。



館林の渋沢栄一、南條新六郎。 鉄道を誘致した偉人について知つて欲しい。



館林の渋沢栄一と呼ぼう!

嘉永元年(1848) 館林(大名小路)生まれ
御番頭支配中小姓
慶応3年(1867) 軍馬隊入隊
明治2年(1869) 1月:半隊司令士
12月:歩卒隊長
(皇居四門の警備)
明治4年(1871) 5月:中尉
10月:退役。館林へ帰郷
民間人として殖産興業に邁進する
養蚕伝習所を起す。製糸場を設ける
明治11年(1878) 第四十国立銀行を開業
館林貯蓄銀行を設立
館林製糸会社を設立
日本織物会社検査役
東京製糸会社創設
後に日本製粉(ニッパン)
明治28年(1895) 東武鉄道発起人(12名)
明治30年(1897) 群馬県農工銀行を設立
明治31年(1898) 第四十国立銀行を改組
株式会社四十銀行に



第四十国立銀行(谷越町)

なんじょうしんろくろう
南條新六郎 嘉永元年(1848)~
大正9年(1920) 73歳

東武鉄道は本所~足利間の鉄道敷設を目的として設立した。12名の発起人の中に旧館林藩士・南條新六郎がいた。新六郎は製粉事業でも活躍。日本製粉の創業メンバーでもある。

[履歴] 岡谷嵯磨介の三男(莊三郎の弟)。16歳の時、南條家の養子となる。出仕し近習を勤める。維新後、明治政府兵部省へ官任。明治4年中尉、10月退官し館林へ帰郷する。その後、実業界で成功。明治10年、第四十国立銀行を創設しのちに顧取。墓は常光寺(石町)
参考文献:「館林人物誌」「商海英傑伝(明治28年)」他

秋元家中・名門の岡谷家に生まれた新六郎。父は館林藩「安政の改革」を進めめた嵯磨介。叔母は山田音羽(お国替絵巻の作者)。叔父に国学者・石川直幹、祖母は岡谷喜津(白蓮院)。嘉永4年、藩医長澤理玄が江戸から持ち帰った種痘を成功させたため、父・嵯磨介が風評にあらがい率先して接種させた子息のひとりである。

*

個人的なエピソードだが、昭和30年頃に南條家を訪れた。(5~6歳頃に母の用事で一緒にお供しただけ...)南條家は内伴木にあり昔ながらの侍屋敷であった。

玄関は土間と畳のある古風は住まいだった。しかも客と対面する形で鎧足が立ててあり、兜の鉄面にヒゲがあった。

薄暗い座敷に背筋がピンと伸びた小柄な老婆が静かに座っていた。新六郎氏の奥様だったのか? 武家の奥方のオーラを發していた。江戸時代のリアルな空気を感じた貴重な体験だった。(田中)

明治11年、谷越町に初の警察署完成! それは優雅な建築だった。

ご先祖の民度の高さがわかる館林警察署庁舎。今のご時世と違い昔は良かったと思わざる得ない。

建物は寄付金で作られた。明治の職人は心意気が粹だ。(田中)



この建物は後に曳家され南小へ。
町立図書館となり
1974年まで利用。
懐かしい建物

南欧の風がふく瀟洒な建築 初代・警察署

明治11年2月建設
谷越町(日光脇往還)

館林町外75カ村の寄附金
1700円で建設。
明治、文明開化の空気を反映
させた瀟洒な建築。
2階正面にベランダがあり
「西洋館の警察署」と評判
となった。大正5年の写真。
(川島惟知編「写真集館林」より)



これを
保存できれば
城下町の魅力が
さらに高まつた。
実に惜しい!

レトロモダン建築の傑作! 2代目・警察署

大正5年建設
谷越町(停車場通り)

大正5年停車場通り(駅前通り)の北側、護念寺跡に建設。(現・東和銀行)
邑楽郡民寄付金4千円、群費6千円で建てた。
美しい木造疑似西洋建築。
昭和3年の写真。
(川島惟知編「写真集館林」より)

館林織維産業のふたつの拠点 「館林織物査定所」「館林織物同業組合」

両毛地区は織物の产地として明治の日本経済を牽引してきたトップランナーだった。桐生、足利、伊勢崎、館林、そして少し離れて小山/結城。それぞれ銘仙、紬など綿織物の名産



館林織物査定所

本紺屋町 (木造2階建)

館林織物査定所として建てられた。昭和5年邑楽織物同業組合が中野から館林町へ移転すると館林織物同業組合となり事務所として使用した。
大正12年頃の写真。
(川島惟知編「写真集館林」より)



県立織物試験場

昭和3年建設
本紺屋町 (木造2階建)

この建築は昭和3年、県立館林工業試験場として建てられた。昭和5年、館林織物同業組合の事業進展で施設が手狭になりこの2階を使用、業務を進めていた。
昭和5年の写真。
(川島惟知編「写真集館林」より)

この地図で紹介された店舗のいくつかは今も同じ場所で営業している。
探してみよう! 例えば、橋田工場(花山うどん)や三井家本舗は同じ。

今に残る織物はここだけになった。 館林紬(山岸織物 館林市仲町2-11) TEL0276-72-0405

現在の紺屋町で染物屋の痕跡をさがすのは難しい。紺屋つまり染色の店を調べると、明治30年代の群馬県営業便覧に一軒(本紺屋町)あるのみだ。

昭和10年頃の町内案内図(下記)では、新紺屋町に山岸染色工場(現在の山岸織物)と記された店だけだ。
機(はた)業は昭和40年代から衰退し、多くの会社や工場が廃業となった。(田中)



←館林紬を素材として
新たなアート作品が作
られた。(安楽岡さん制作)

↑山岸織物の館林紬サンプル。
見本帳に残された伝統の縞
模様が美しい。

昭和10年頃の館林町



↑その後、商工会議所の事務所として使用されてきた。そして医院やレストランとして活用されたが、平成27年(2015)解体された。

